続・近代文学

作家とその世界❷

ゼミナール

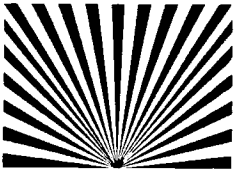
桑原武夫
多田道太郎
梅原　猛
飛鳥井雅道
作田啓一

朝日新聞社

続・近代文学

作家とその世界❷

ゼミナール



桑原武夫
多田道太郎
梅原　猛
飛鳥井雅道
作田啓一

朝日新聞社

講師略歴

桑原武夫　京都大学名誉教授。明治37年生まれ。著書『ヨーロッパ文明と日本』『論語』『桑原武夫全集（7巻）』など。

多田道太郎　京都大学助教授。大正13年生まれ。著書『美学入門』その他。文化評論，映画批評など。

梅原　猛　京都市立芸術大学学長。大正14年生まれ。著書『水底の歌』『隠された十字架』『黄泉の王』『美と宗教の発見』など。

飛鳥井雅道　京都大学助教授。昭和9年生まれ。著書『幸徳秋水』『近代文化と社会主義』『日本近代の出発』など。

作田啓一　京都大学教授。大正11年生まれ。著書『恥の文化再考』『価値の社会学』など。

◇近代文学・作家とその世界2◇定価1200円◇著者　桑原武夫　多田道太郎　梅原　猛　飛鳥井雅道　作田啓一◇昭和50年10月10日第一刷発行◇発行者　朝日新聞社　宇野　博◇印刷所　内外印刷◇発行所　朝日新聞社（東京・大阪・北九州・名古屋）

0391-254302-0042

目

次

川端康成……梅原　猛……131

美の裏側……133

魔界難入——川端さんと私——作家を死に追いやるもの——地獄の住人——祖父の死を写し取る——ゆがんだ心の回復

抑制の崩壊……167

徒労から脱出——倫理の枠外へ——少女のあとをつける銀平——狂気の美的空想

芥川龍之介……飛鳥井雅道……201

「物語」と「真実」……203

不運な作家——デビューとゴシップ——ストーリー・テラーとして——「奉教人の死」——「真実」と「美」——「真実」は一つでない

「文体」と「神経」……231

大正作家の生活条件——「路上」と恋愛——衰えた肉体——「保吉」と「信輔」——神経の作品

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

太宰　治……作田　啓一……259
日本の社会と羞恥の文学……261
太宰治の人気――「はにかみ」の文学――「恥」と「罪」――「はじらい」の分析――日本人の中央志向性――太宰治の集団離脱
作品の分析……286
「だれか見ている」――市民・対・芸術家――「女の決闘」の分析――神・対・罪人――一つの整理――虚無からの創造
付・五作家年譜抜粋……312
――朝日ゼミナール「作家とその世界（続・近代文学）」から――

装幀・山本耕三

永井荷風

桑原武夫

荷風の生活

文献と伝記　私は永井荷風が好きで、中学生のころから愛読しておりますので、きょうのお話が充分客観的であり得るかどうか、自信がございません。ゼミナールでありますから、できるだけ客観的に学問的にお話しなければならないことはわかっておりますけれども、人が初恋の人のことを話すとき、客観的になれといっても無理なのではないか。荷風のことを充分突き放してお話できるかどうか、心許ないのです。その点あらかじめお許しを願っておきます。

私は前に「永井荷風」という文章を書いたことがありまして、これは私の全集（第一巻）にもはいっておりますし、それからここに持ってきております筑摩書房の『現代日本文学体系』の23と24が「永井荷風集」になっておりますが、その24の巻末に付録としていろいろの人の荷風論と一緒に私の「永井荷風」も載っております。今度荷風を少し読み返したのですけれども、あまり新しい見解に到達してはおりませんので、大体これに書いてあるようなことになるだろうと思います。それ

は私としても遺憾とするところですけれども、年のせいでやむを得ません。ですから、もしお暇があったら、それをお読み願えれば幸せだと思います。

まず、永井荷風を皆さんはどれだけお読みになっているか、これがわからないんですけれども、まだの方はぜひお読み願いたい。お読みになるに値すると確信いたします。まず文献のことから申しますと、『永井荷風全集』というのは幾つもございます。最初に出ましたのは、私が中学生のころで古い話ですが、荷風が三十九歳のとき、春陽堂から全六巻の「全集」というのが出ておりまして、これは大正七年に第一巻が出て、最終巻が大正九年です。そういうだけで、すでに皆さんは時代の変遷をお感じになったと思います。たった六巻の全集に三年かかっているのです。荷風の生きた時代というのは、だからまだかなりのんびりした時代であったということがこれでわかると思います。私は友達の兄さんがその全集を持っていたのを借りて読んで、「女優ナナ」などというのに衝撃を受けたことを覚えております。そして早くお茶屋なるものに行ってみたいなどと妄想したりしておりました。全集はその後いろいろ出ておりますが、現在定本となっておるのは、岩波書店の『荷風全集』全二十九巻であります。これがテキストとしてはいちばんよろしい。第二十九巻には荷風の詳しい年譜、著作年表のほかに荷風宛ての手紙なども入っております。

次に荷風の伝記といたしましては、秋庭太郎さんの『考証永井荷風』というのが昭和四十一年に岩波書店から出ております。七三二ページの厚い本でありまして、実に綿密正確な伝記であります。生まれる前の先祖から始めまして、死ぬまで編年体に詳しく書いてあります。しかし、題名のとお

り考証でありまして、伝記を書くことによって荷風の日本文学史における位置づけとか、荷風の基本思想とかを正面から論じようとしたものではありません。そうしたことは秋庭さんの考証した事実を踏まえて、こちらが考えるべきことであります。その基本資料としてたいへん立派な仕事であります。そのほか荷風についてはたくさんの研究、あるいは評論がありますけれど、それはいちいち申し上げません。

このごろ日本の文学界、あるいは文壇では、文学者、芸術家の伝記がたいへん流行しております。おかげでいろいろ細かいことがわかってきたのは有り難いのですが、荷風が芸者の八重次に初めて会ったのは、何年何月何日、どこであったか、こうしたことを調べるのも面白いことだろうけれども、それで文学の研究ということになるかどうか、文学の本質に迫ったことになるかどうか、これはたいへん疑問だと思いますね。シェストフというロシアの批評家が、「伝記作者というものは、私たちにあらゆることを話してくれる——私たちにとって知ることが重要な、まさにそのことを除いては」という鋭い皮肉の言葉を吐いています。チェーホフの洋服屋の名はわかっても、彼の心の中に起こった重大なことは作

桑原武夫氏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

品によらなければわかるまい、というのです。これは正しい議論です。にもかかわらず荷風の作品だけではなく、実生活まで詳しく知りたい人が少なくない。私もその一人であります。そういう人は荷風の日記「断腸亭日乗」をお読みになるとよろしい。大正六年から死ぬまで書き続けたものです。

たとえば昭和十一年一月三十日のところを開いて見ますと（岩波版全集の第22巻の一七ページ――以下、22・一七というふうに略記）、去年の冬使っていた家政婦政江という女が帰りぎわに「定めの給料以外にゆすりがましき事を言」わなかったと称めたあとで、「三、四十年来の事を回想して手切金を取らずして去りし女まずこの政江一人なるべし、つれづれなるあまり余が帰朝以来馴染を重ねたる女を左に列挙すべし。」としていちいち番号をつけて一六番まで挙げているところがあります。三番吉野こうというのは新橋の芸妓富松の本名であります。荷風は好きな女にせがまれて左の腕に大きな文字で「こう命」と入れ墨をし、富松も「壮吉命」としたのです。ずいぶん古風というか、無鉄砲なところがあったのですね。四番の内田八重はやはり新橋の八重次、のちに藤蔭流の家元となった藤蔭静枝で、荷風と正式に結婚したこともあるのですが、突然家出をしてしまう。そのいきさつは「矢はずぐさ」という随筆に書いてありますが、たいへんな才媛であったことは、そのときの置き手紙を見てもわかります。ちょっと読んでみます。

「一筆申残しまゐらせ候。私事こちらへかたづき候事よくにも見えにもあらずただ一つ捨がたき恋のれきしがいとほしさに候。もとよりなれぬ手業お針もおぼつかなく水仕事は云ふまでもなく候。さぞお気に入らぬ事だらけと御きのどくに存上居候も私はそのくらゐの事くんで下さる御方と日々

うれしくつとめ居候処あなた様にはまるで私を二足三文にふみくだしどこのかぼちゃ娘か大根女郎でもひろって来たやうに御飯さえたべさせておけばよい夜の事は売色にかぎる夫がいやなら三年でも四年でもがまんしてゐるがよい夫は勝手だ。女房は下女と同じでよい。『どれい』である。外へ出たがるはぜいたくだとあたまっから仰せなされ候。なるほどそれも御もっとも世のつねの夫婦ならばさうなくてはならぬ処さなきだに女はつけ上りたがる者夫としてはつね日頃そのくらゐに女房をおしつけておかねばならぬ事私とてもよく存じ居候。私は殊にあなたがそれほどになさらずとも来る時すでに心にちかひし事もあり決して御心配かけるほどぜいたくや見えをしたがる者にてはなく候。そんな事わからぬあなたともおもはれずつまりきらはれたがうんのつき見下されては長居は却而御邪魔此意味向島の老人に咄し候ても通ぜずよんどころなく候。此度は父の許え帰らず候。此手紙父に御見せ下されてあなた様の御気のすむやうどふとも御はからひ御下度候。右申残し候。あらあらかしく二月十日夜八時半旦那様御許八重より。」(29・五一三)

なかなかうまいものです。荷風の浮気に八重が腹を立てたのです。またあとで「恋の歴史のいとほしさ」に、焼け棒杭に火がついて、二人はよりを戻しますが。こんなふうに一人々々注釈しだしたらきりがありませんが、このリストを見てすぐ私の頭に浮かぶのは、スタンダールの『アンリ・ブリュラールの生涯』の冒頭のところです。五十歳になったスタンダールが昔を思ってうたた感慨に耽けり、自分の好きだった女の名前を湖のほとりの砂の上に書くところがあります。十二人挙げているが、思いのかなった女性にだけ番号をつけた。それは六番までです。つまり半分で、あとは

激しい憧れの対象だけで終わったのです。荷風はスタンダールの真似をしてリストをつくったのではないでしょうが、彼のほうはプラトニックラブなるものを認めない立場です。そして十六人の名を挙げたあと、「此外臨時のもの挙ぐるに遑あらず」と書いています。荷風のほうが女性に関してはスタンダールより幸福であったように見うけられます。しかし、逆に、その幸福のために荷風はスタンダールほど偉い小説家になれなかった、といえるかもしれません。

文学者は世界中にたくさんいますが、その作品に感動しなければはじめから問題になりませんが、作品には感心するけれども、それをつくった芸術家自身にはたいして興味が湧かないというのと、作品はもちろん面白いけれども、それをつくった文学者自身にも興味があるのと、二種類あるように思われます。フランスでいいますと、ビクトル・ユゴーとボードレール、二人ともたいそう優れた詩人ですけれども、ビクトル・ユゴーの私生活はあまり興味を惹かないわけです。ところがボードレールのほうは、ものすごく皆の好奇心を掻き立てる。ジャンヌ・デュバール、サバチェ夫人、それからマリ、ボードレールの好きだった女のことも全部調べが行きとどいている。ところがユゴーも決して女出入りがなかったわけではないのですけれども、その私生活、あるいは女性関係、これにはあまり興味が持たれない。バルザックとスタンダールの間にも同じ関係が感じられますね。谷崎潤一郎と永井荷風の間にも同じことが感じられないでしょうか。荷風の作品を読むと、私生活まで知りたいという気分にする何ものかが彼にはあるわけです。なぜそうなるのか。それは彼のパーソナリティーにもよるし、また彼の技巧もあるのですが、彼の文学にはいつも一種切実なものが

あるからだろうと思います。

上流都会人　文献解題から話が脱線してしまったようですから、本筋に戻って、荷風の生い立ちのことを少しお話します。荷風は名門の出であります。永井家の先祖は徳川家康の名将、永井右近大夫直勝でありまして、稀代の美少年で歌舞音曲にも優れていたようですが、長久手の戦いに敵の大将、池田勝入斎を討ち取って名をとどろかし、下総古河で七万二千石の大名となった人です。荷風の家はその庶子から出た分家であって、塩田などをつくって財産をつくったのですが、学者や俳人などインテリをたくさん出しています。荷風の父は久一郎といって、幼いときから幕末の有名な儒者鷲津毅堂の弟子となり、維新後は東京に出て大学南校（のちの東大）で勉強し、やがて名古屋藩からアメリカに留学させられた。帰国して新政府の高級官吏となりました。晩年は郵船会社に入り、上海支店長にもなりましたが、荷風はそのとき父について中国へ三月ほど行っています。久一郎は禾原（かげん）と号し、学問もあり漢詩もつくるという文人であります。荷風のお母さんは鷲津毅堂の娘であって、毅堂は秀才弟子に娘をもらってもらったわけです。この二人の間の長男として壮吉が生まれたのが一八七九年、明治十二年のことであります。

荷風は名門の裕福な家庭に生まれ、ずっと東京で生活した都会インテリであります。貧乏な田舎者でないというのが、その基本的特色であります。荷風の小説のどこを読んでも風の吹きすさぶような、不作になれば娘を売らねばならぬような東北の風景などは全く出てきません。柳田国男や折

口信夫が捉えたような日本の常民の生活はほとんど出てきません。京都、大阪へはちょっときたことがありますが一向に感心していない。上方文化のはんなりしたところはないのです。もっとも京都からは一流小説家は明治以来一人として出ていないのですから、そんな注文をつけるのは無理かもしれませんが。荷風には斎藤茂吉みたいな田舎者風のエネルギーがありません。茂吉には向上心のようなものがいつも感じられますが、荷風は地位でも趣味でもだんだん下がってゆきたがっているようです。幼いときは上流社会のお屋敷に住んで多くの人間にかしずかれていたのが、最後は独りぼっち小さい家で変死しているのを見つけられる、そういう過程で生まれた文学という感じがいたします。荷風も茂吉もたいへん女好きなところは共通ですが、国家体制というようなものに対する態度は正反対といえましょう。荷風は『講和をことほぐ歌』などというものは書けなかったでしょう。

荷風の育ちのよさ、それが可能にしたところの洗煉された趣味、高い教養、それらは石川啄木のような貧しい病天才の反感をかうのに充分であって、荷風がフランスから帰って日本の田舎臭さを冷笑するのを見ると、許しがたい、ということになるんです。こういう言葉がありますね。「永らく東京にゐて金を使った田舎の金持の息子が（これは荷風のことですね、日本は田舎で、東京というのはパリのことですね）、故郷に帰ってきて何もせずにぶらぶらしてゐながら、その土地の芸者の野暮なこと、土臭いことを、いや味たっぷりな口吻で逢ふ人毎に説ゐてゐるやうな趣きがある。」石川啄木という人はやっぱり評論家としては一流だと思いますね。荷風の弱点を見事に突いている。

ただ、その荷風がやがて盛岡の芸者もいいところがあるというようなことをいい出すわけです。

ここで注目しておきたいことは、荷風のお母さん、そしてそのお母さん、つまり荷風のおばあさんがクリスチャンであり、彼の弟が牧師であったことです。キリスト教というものは、今や日本ではほとんど文化的な意味を失ってしまいました。この中にクリスチャンがいらしたら怒られるかもわからないけれども、文化的精神的な作用はすっかり衰えたといえると思います。しかし明治の文化を考えるときには、常にキリスト教というものを頭に入れて置かねばいけないのですね。大正に育った人間を考えるときはマルクス主義を常に頭に置かねばならないのと同じ関係です。志賀直哉を考えるときには内村鑑三のキリスト教を抜かしては考えられない。島崎藤村にも、中里介山にも、宮崎滔天にもキリスト教は作用しています。荷風が外面的に見てどんなに通俗道徳に背くような生活をしていたにしても、彼にはいつもラディカリズムがあって、どこかにキリスト教風の一神教的な筋を通すような精神が生き生きしているのはたいへん面白いところだと思います。

荷風は外面的に見れば、本人の主観はともかくとして、幸福な幼少時代を送ったわけです。幼いときに幸福な、ゆたかな家に育ったか、不幸な貧しい家に育ったかということは、その人の芸術をおそらく決定する大きな要素だと思うのですけども、荷風は夏目漱石や宇野浩二と比べますと、裕福な家に育っています。そういう点で荷風は志賀直哉と同じ線にいるわけですね。志賀さんも一生金に困ったことがないんですけども、永井荷風も金に困ったことがあるでしょうか。彼は若いときに親の金でアメリカへ渡って、それからフランスへ行くが、そのときにでもリヨンの正金銀行の行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com